

## 序章

# 男性学とは何か

西井 開



杉田 最初に、西井さんから、日本の男性学の歴史について簡単に説明してもらいます。それから四名がそれぞれ、自分が男性学の名著と考える一冊について、プレゼンします。発表のあとに少しだけその本について議論します。それが終わったら、後半は全員で本格的にディスカッションする。そうした流れになります。

今回の場を設定した理由ですが、「まえがき」にもある通り、NHKでお正月に放送された『100分deフェミニズム』（二〇一三年）という番組を見ていて、「楽しそう」「これを男性学でもやってみたい」と、素朴に思ったのがきっかけです。SNSで僕が割と軽い気持ちで呼びかけてみたら、すぐに西井さんと天野さんが反応してくれた。編集者の方も連絡をくれて。その後西井さんが川口さんを誘ってくれて、「この指とまれ」方式で決まったんです。

だから、あまり重苦しくやるつもりはないんですけれど、男性学の問題を当事者がやると必然的に重苦しくなるかもしれません（笑）。基本的な趣旨としては、近年、男性学とい

う言葉を再びそれなりに見かけるようになった。「男性学ルネッサンス」とまで言えるのかはわかりませんが、#MeToo運動やフェミニズムのポピュラー化の流れにも呼応して、男性学関連の書籍もかなり目にするようになりました。とはいえ、男性学とは一体どういう学問であり実践であるのか、どんな歴史があるのか、まだまだ世間一般に十分には知られていない気がしたんですね。

男性特権や男性の構造的な優位性が批判され、「オジサン」たちの権力体質やハラスメントが批判されるようになってきました。しかし他方では、男性たちの中にもいろいろ複雑でモヤモヤした思いがあったり、不遇感があったり、あまり幸福を感じられないという屈折した感情もあったりする。男性たちの中のそうしたややこしい感覚を解きほぐして、言葉にしていくための場がもっとあってもいい。

日本では男性学はまだまだ発展途上なので、そうした試行錯誤も含めて、男性学というものをもっと身近でポピュラーなものにしていきたい、という気持ちがまずありました。

もちろん、今回集まった四人の中でも、男性学についての理解や考え方が結構違うところ

ろもあるでしょう。しかしまずは男性学的な試みの一つとして、四人が各自にとっての男性学の名著と考える一冊を持ち寄ってみました。その内容を読者の皆さんにお伝えして、男性学の必要性や魅力を語り合ってみたい。

そういう割とゆるい感じで始めた今回の場なのですが、まずは西井さんのほうから、男性学とは一体なんぞやという、全体の導入のためのお話をしてもらいます。では、よろしくどうぞ。

### 男性学の定義

**西井** 西井と申します。専門は臨床社会学という臨床と社会学を架橋するような分野なんです。男性に関する問題というのは、認識や価値観、メンタルヘルスといった臨床的テーマと、ジェンダーという社会学的テーマの交点だと思っています。また研究を進める上で、男性学にインスパイアされてきたので、そういった立場から男性学とは何かという点について、その成立から現在に至るまでの経緯も踏まえながら、最初に紹介したいと思います。

加えて、男性学は英語圏で先進的に取り組まれてきた学問分野なのですが、今日は日本における男性学の話をしたいなと思っています。

まず男性学の定義から紹介します。実は男性学の定義というのは論者によって微妙に異なってくるんですね。男性学の草分け的存在である社会学者の伊藤公雄<sup>きみお</sup>さんは、『男性学入門』という本の中で、男性学を「男性の視点から、この男性社会を批判的に解剖することを通じて、男性にとつてより、人間らしい、生活を構想するための、実践的な学<sup>\*1</sup>」であると定義しています。後で述べますが、彼にはメンズリブという男性のための運動を實踐していたバックグラウンドもあり、男性学を男性がよりよく生きるための学問として位置づけています。一方、同じく社会学者の多賀太<sup>ふたし</sup>さんは、もう少しアカデミックに男性学を定義し、「女性学のインパクトを受けた、男性および男性性を対象とする研究」のうち「男性の視点から行われるもの、あるいは女性学に対する男性からのリアクシ<sup>\*2</sup>ョンとしての性格を持ち合わせたもの<sup>\*2</sup>」としています。

この多賀さんの定義について少し補足しておきます。定義の中に「女性学のインパクトを受けた」とあるんですが、女性学やフェミニズムが男性学の出自にとって重要な位置を

占めているということを多賀さんは示しています。どういうことかというところ、フェミニズムの運動が起きるまで、人間に関する研究はジェンダーというフィルターを通さずに行われてきました。その上、人間＝男性であるという前提だったので、女性の経験というのは光が当たってこなかったわけです。そうした状況に対してフェミニズムや女性学は、ジェンダーというものが存在するというところ、そして女性が女性であるがゆえに抑圧されてきた歴史をひもといたわけです。そのインパクトの結果、男性も同じく社会構造の影響を受けているという視点が立ち上がり、「ジェンダー化された存在」として分析することができるといったところ。そうした経緯の中で成立した学問と言えるところです。

ただし、ジェンダーというフィルターを通した男性に関する研究は、実は男性学に限らず、男性研究、男性性研究など、いくつかの名称があります。これらの定義もいろいろあり、研究者も細かく使い分けています。多賀さんは「男性・男性性研究」という表記を基本としつつ、その中でも「男性の視点から行われるもの」を男性学としているわけです。

伊藤さんと多賀さんの男性学の定義は異なるところもありますが、男性が男性の視点から、いわば当事者性を生かしながら行う研究であると位置づけた点で共通していると言え

ます。

今回の企画も取り上げる書籍を踏まえると「男性・男性性研究」と表記するのが正確ですが、男性学というワードがある程度認知されていますし、わかりやすいので、男性学をタイトルに入れています。しかし実際には、男性を研究する分野の中でもさまざまな立場があると理解してもらえたらいいかなと思います。

### 男性学の道のり

西井 次に男性学が、どういう歴史を歩んできたのかということについてです。遡ると一九八〇年代から用語としてはあったのですが、その名を有名にしたのは先ほどご紹介した伊藤公雄さんの『男性学入門』という本です。「強くなければならない、恐れてはならない、他人から『男らしい』と承認を受けなければならない」という男性たちの思い込みを伊藤さんは「鎧」<sup>よろい</sup>にたとえて、女性の社会進出が拡大する中で男性たちはいつまでもその鎧を脱ぐことができていないから、さまざまな問題が生じてくるんだということを提示しました。

そして、その男らしさの要素として、「優越志向」「権力志向」「所有志向」という三つを抽出しています。これらの男らしさに男たちは縛られており、その結果としてコミュニケーションがなかなか取れない、弱音が吐けない、社会的孤立に陥っていく、果ては自殺してしまうといった問題や、非行、暴力、あるいはハラスメントに至るのではないかということが示されました。

先ほど男性学の定義を紹介した際、伊藤さんがそれを「実践的な学」と定義していたように、伊藤さんは男性学をメンズリブという活動と連動的に捉えていました。メンズリブは男性解放運動とも訳されますが、日本ではその端緒として「メンズリブ研究会」が挙げられます。一九九一年に大阪で結成されたグループで、誰にも弱さを見せられないとか、働きづめで心身の調子を崩しているとか、家族や地域との関係性を失っているとか、自分のしてしまった暴力の背景に男らしさの問題があるんじゃないかとか、さまざまなテーマが、このメンズリブ研究会というグループの中で論じられていました。

隔月で開かれていたようですが、十数人の男たちが集まって自分の感情や体験を語り合う、それ以外にも男同士で女装をする、喫茶店で甘いものを頼んでみる、異性愛の男性同

士で手をつないで街を歩く、互いの身体を支え合うようなボディーワークをやってみる、料理会を開くなど、さまざまなワークショップも開いていたようです。男性たちが自分の生きづらさや痛みに気づいていく。自分の加害性についても自己省察していただくじゃなくて、男としての生き方を豊かにしていこうとするのがこのメンズリブ研究会の目的だったようです。

男性学のほうに戻りますが、メンズリブがそうだったように、男性学では男性の特権性や加害性の問題についてだけではなく、男性の被抑圧性や生きづらさについても重点的に着目されてきた系譜があります。先ほども挙げました多賀太さんは、男性の問題の本質は、「男性優位の社会構造を維持するために、能力発揮、成功、上昇へと駆り立てられること」\*4であり、社会的達成への強迫が男たちにあるんじゃないかと指摘しています。

同様に男性学研究者の田中俊之さんとしゆきも、以下のように論じています。非正規雇用の増加や、終身雇用制度の廃止、平均年収の減少といった時代的な変化によって、男性たちが過去できていた当たり前のことができなくなってきた。つまり正社員として安定して働いて、結婚して子どもができて……といった「普通」とされるような男性像を実現できないこと

への葛藤が、男性の生きづらさの原因にあるんじゃないか。「相対的剝奪感」と表現されたりしますが、前の世代ではできていたことができなくなった、剝奪されたような感覚というものが、男たちの心理的な苦痛に関わっているということが繰り返し提示されてきました。

## 男性学への批判

西井 この三人が男性・男性性研究における男性学という領域では、中心的な論者なんです。すが、それに対してさまざまな批判が展開されてきた歴史があります。

まず、社会学者である須長史生<sup>すながふみお</sup>さんによる批判について話したいと思います。彼は薄毛、もしくは頭髪のない男性へのインタビュー調査をされ、それは『ハゲを生きる』という本にまとまっています。<sup>\*5</sup> すごくいい本です。彼は「ハゲた」男性たちが周りの男性から頻繁にからかわれている実態、そしてそのときの反応に着目しました。からかわれた「ハゲ」男性は堂々とした自分、堂々とした態度を保持するためにその場から逃げない、言い返さない、ただ耐えるという実践を行っていたんです。それは既存の男性学で言えば、「男ら

しい」と言える。でも、男性同士でからかい合うような空間で生きていくためには、「『鎧』で身を固めざるをえない状況」<sup>\*6</sup>があるんじゃないかという実態を須長さんは明らかにし、先ほど説明した伊藤公雄さんの「鎧」論を批判しました。つまり、伊藤さんの理論では男性個人が男らしさへのこだわりを心理的に内在させているとされけれど、他者との関係性の中で「男らしさ」が立ち現れる可能性も考える必要があると主張したんですね。この後、僕が話をする『男同士の絆』<sup>\*7</sup>というのはまさにここ、男性個人の心理だけではなく男性同士の相互作用を論点にした本だと思っています。

二つ目に、大きな批判としてあるのが社会学者である澁谷知美さんの、男性学は「心理レベル／個人レベルのトピックに先鋭化させがちである」<sup>\*7</sup>という批判です。このことを考えるために、まず「特権のコスト（代償）」という概念について説明します。特権とは、社会の中でマイノリティたちが受けている抑圧や差別を免れている状況を指します。性別の文脈で言えば、性別を理由に昇進を妨げられるようなことがない、積極的に家事や育児をしなくても批判されない、夜道を歩くときに周りを警戒しなくてもいいといったようなことです。しかしこうした特権には代償があります。つまり、男性ならば賃労働を積極

的に行わなければならないという圧力や、情緒的なことよりも論理的であるべきだという規範、競争的な文化にからめとられるといった課題が生じやすいですね。

こうした性差別的な文化や制度がもたらす生きづらさを男性学は指摘してきたわけですが、しかし既存の男性学はこうした生きづらさを、「男らしさの鎧」や「強迫」といった心理的な次元でしか把握しておらず、制度をどう転換していくのかが十分に検討されていない、と澁谷さんは指摘したわけです。また、こうした男性の心理的課題ばかり取り扱うことで、「層としての男性」と「層としての女性」\*<sup>8</sup>の間にある抑圧関係、つまり女性が受けている性差別の問題が希薄化されてしまうんじゃないかという危惧についても言及しています。

さらに三つ目の批判、今日登壇される川口遼さんが二〇〇八年に書かれた論文「男性学における当事者主義の批判的検討」\*<sup>9</sup>を紹介したいと思います。川口さんは、既存の男性学の「男性の視点から行われる」という点について批判的に検討されています。どういうことかという、男性学の研究者たちは、確かに男性の視点を持って研究に取り組んでいるけれど、同時に彼らは社会資本や文化資本が大きい男性たちである可能性が高い。つまり

人種、国籍、階級、セクシュアリティの面でマジョリティである彼らが当事者の視点を重視して研究すれば、彼らは「男性」を研究していると言いつつ、実は「特権性の高い」男性しか捉えられていないんじゃないか。つまり、「一枚岩的に」男を捉えてはいけない。ジェンダーと、それ以外の社会構造、例えばセクシュアリティやジェンダー・アイデンティティ、階級、障害といった構造との相互作用を考慮して分析するべきだと批判されたわけだ。

男性学にはこれら三つの大きな批判が展開されてきた歴史があり、その批判によって鍛えられ、また論点に広がりを持つようになってきました。

### 男性学の論点

西井 では男性学（男性・男性性研究）はどのような論点を射程に入れるに至ったのか、まとめましょう。

男性学のメインストリームでは、男性であるがゆえに抱える代償、例えば弱音を吐けないといったメンタルヘルスの問題や、仕事に過剰に打ち込んでしまうという労働の問題、

達成できると思っていた立場にたどり着けないという相対的な剝奪感、そして男性性の証明としての暴力などの問題が提示されていきました。それに対し、須長さんの批判では、男性同士の関係性の間で生じる問題も見つめる必要があること、澁谷さんの批判では、男性と女性の間の非対称、ジェンダー間の権力構造も同時に見る必要があるということが示されました。さらに川口さんの批判では、ジェンダー以外の構造との相互作用も見ないといけないことが明らかにされました。

特権の代償、加害性、男性間の相互行為、ジェンダー間の非対称性、ジェンダー以外の社会構造からの男性の把握。これらの論点は近年における男性・男性性研究にも継承されています。例えば私が二〇二一年に出した『「非モテ」からはじめる男性学<sup>\*10</sup>』は、須長さんの研究に大きく依拠しており、男性集団内において「非モテ」と呼ばれるような男性たちが、からかいや排除を受けるといふ問題を中心的に取り扱いました。また、社会心理学研究者である平山亮<sup>りやう</sup>さんは、親を介護する息子に焦点を当てた調査を行い、ジェンダー間の非対称性についてより精緻に論じています。<sup>\*11</sup> さらに周司<sup>しゅうじ</sup>あきらさんは、男性学が取りこぼしてきたトランスジェンダー男性の経験を理論的に記述し、男性学の新たな展望を示

しています。<sup>\*12</sup> これは川口さんの議論を展開した具体的な研究だと位置づけることができるでしょう。

以上のように、男性学と一言で言っても、本当に立場によって主張が大きく異なるし、研究対象にしている分野もさまざまです。僕はTwitter（現X）をだいぶやり込んできた人間なんですが、「男性学」で検索すると、こう……何と言うのか、穿<sup>うが</sup>った解釈をされていることが多いんですね。よくあるのは「フェミニズムに従順な学問」というイメージや、「男性に対して批判的で反省を強いる学問」というイメージです。しかしこれは端的に誤りです。ここまで話してきたように男性学・男性性研究にもいろいろあるからです。男性の生きづらさを中心的に扱う研究もあれば、男性支配の問題に焦点を当てる研究もある。一言でこういう学問だとは言いい切れないし、一つのイデオロギーでもないというのがポイントだと思います。

現代では「男性」と一括<sup>ひとくく</sup>りで論じるというよりも、各論的というか、多様な領域で男性・男性性研究が取り組まれています。今日は川口さんが『マスキュリティーズ』でその辺りのことをお話ししてくださいさると思いますが、各論的に男性のさまざまな問題を論じ

ていけるというのが、今、男性学の到達点と言えるのかなと考えています。

駆け足でしたが、以上になります。ありがとうございました。

杉田　ありがとうございます。西井さんに国内の男性学の大まかな流れを整理していただきました。それではここからは、個別の発表に入っていきます。最初は天野さんです。よろしくどうぞ。